

## レポート

# 「親愛なるザンビアのデニスへ」

渡部 沙織

(札幌市立西岡北中学 2年)

ひとりの中学生のレポートを読んで、「国際理解」とは何だろうか考えた。

言葉が十分にわからなくても気持ちが通ったこと、学校以外でも学ぶことがたくさんあったこと、世界の国々のつらい現実も知ったこと、等々。当時中学1年生だった13歳の少女が体験や感想を綴ったレポートの一部を紹介したい。

あわせて、北方圏センターが、北海道が受け入れた技術研修員、JICAの技術研修員などの協力で、この秋に積丹町と静内町で実施した国際理解を進める事業の一端を掲載する。

沙織ちゃん

この間の交流会は楽しかったですね。君と会うのはいつも楽しいです。リフレでは他の事にも参加したみたいですがどんなことを学びましたか。

私は3月28日に帰国します。国に帰るのはとても嬉しいのですが、沙織ちゃんをはじめここで知り合ったたくさんの友達と別れるのは寂しいです。君は私の妹です。

元気に頑張ってください。帰国前にもう一度会えるといいですね。

元気で。 デニスより

これは、私の友達で、兄でもあるデニスがくれたE-mailである。デニスはザンビアから来た理科教師で、北海道が受け入れている海外技術研修員として昨年1年間北海道で勉強した。

### ●● もっと話したい ●●

デニスと出会ったのは夏休みにあったフィリピンの文化を紹介するイベントだった。私は中学生になって英語を勉強し始めてから数カ月しか経っていませんでしたし、デニスも日本に来てからの数カ月しか日本語を勉強していな



デニスはおはしを使うのが上手です！  
(沙織さん：左 とデニスさん：右)

かった。私は自己紹介しかできなかったが、デニスの優しい笑顔にすぐに親しみを感じた。もっといろいろ話したいという気持ちがふくらんでいった。それからは、ソフトボール大会に出たり、クリスマスを祝ったりと何度も会えた。そんな時、私は単語を並べ、デニスは会う度に、覚えた日本語が増えていった。

ザンビアには、言語が数十種類もあるそうだ。例えば、デニスのおばあちゃんの村の人たちはデニスとは全く違う言葉を話すらしい。しかし、デニスは、「村の人たちが何を言っているか全然わからないけど問題ないよ」と言うのだ。きっと言葉ではなく気持ちが伝わっているのだろう。デニスのこの話に、多くの人たちと交流する時、まず大切なのは『心』なのだということ強く感じた。デニスと一緒にいる時間はとても楽しく、心からの友達になった。

### ●● 外国のつらい話 ●●

テレビの映像や、学校の社会の授業で習ってアフリカの事を何となく知っているつもりでいた。デニスとマラリアの話になった時も、怖い病気だと頭では分かったつもりだった。そして、ちょうど新聞で読んだ、使わなくなった蚊帳<sup>かや</sup>をザンビアに送っている日本のNGOの人の話をした。すると、デニスが、「それは大切なこと。蚊は怖いからね。僕もザンビアに帰ったらまず一番初めにマラリアの予防注射をするよ。帰るのはとても嬉しいけど注射は嫌だね」と笑いながら言ったので、私もつられて笑ってしまった。その時、デニスが一瞬寂しそうな顔になって、「僕の妹

はマラリアで死んでしまったんだ」と言った。私は思わず息をのんだ。同時にマラリアが私にとってみぢかな恐ろしい病気になった。デニスに、亡くなった妹の代わりに私が妹だと言われて、胸が熱くなった。

### ●● とてもよくわかった ●●

クリスマスパーティーをした時、私は理科の教科書を持っていった。苦手な入射角と反射角についてデニスに質問すると、図を書いていてねいに教えてくれた。すごくわかりやすかった。日本語だと難しい言葉で説明されているのが、英語で簡単に説明してくれたので、逆にとてもわかりやすかったのだと思う。私は、このことにすごく感動して、何とか私の学校に来てみんなに、理科の授業を英語で教えてもらえないかと思った。先生に話してみたが、中学校はとてもスケジュールが忙しくて実現出来そうになかった。とても残念であった。



入射角と反射角のことを教えてもらった時  
(手前は沙織さんの弟さん)

この一年間、外国の方と直接話す機会が増えた。話したいことはたくさんあるのに私はまだ英語がスラスラと頭の中に浮かばない。デニスには、心の信頼があれば伝わるし、言葉で言えないことをそんなに気にしなくても良いということを見せてもらったが、言葉



デニスさんと渡部ファミリーのお別れ会  
(2001年3月17日)

でコミュニケーションがとれることもとても重要である。学校の授業などで

英語を勉強して、様々な国の人たちと会話できるようになりたい。

### ●●私の目標●●

デニスとは、あと1カ月でザンビアに帰ってしまう。私に英語、理科、そして『心』のコミュニケーションの大切さを教えてくれたデニスが帰ってしまうのはとても寂しいが、デニスは一年ぶりに家族に会える。私にも大きな目標ができた。それは、いつか英語が話せるようになって、自分の力でザンビ

アに行ってまたデニスに会うことだ。今の私はザンビアに行くなどとてもではないができない。でも、大きな目標に向かい、自分を高めていくことが、私のこれからの課題になると思う。

### ●デニスさんのプロフィール●

デニス・シルングェさん  
(Mr. Dennis Silungwe)

ザンビア共和国出身。

平成12年度北海道海外技術研修員として北海道立理科教育センターで研修

## ●●●●●●●●●●国際理解促進事業 2 題●●●●●●●●●●

### 「積丹町の小中学生との交流」 9月20日(木)～22日(土)

北方圏センターでは、積丹町教育委員会の協力を得て地元の小・中学校で国際理解促進事業を行った。北海道が受け入れをしている海外技術研修員13名、サハリン技術研修員2名、自治体協力交流研修員1名の計16名が参加し、小・中学生をはじめ地元の人々と交流を深めた。

参加研修員は札幌からバスで約2時間、積丹町に到着。美国(参加児童数29人)、幌武意(同8人)、入舸(同10人)、日司(同4人)、野塚(同12人)、余別(同17人)の小学校6校と、美国中学校(参加生徒数22人)を分散して訪問した。珍しい国からの訪問者として、あらかじめ迎える研修員の国の挨拶の言葉を練習するなどして心待ちにしていた子供たちは、はじめは緊張の面もちで挨拶を交わしたり自己紹介を

していたが、各校それぞれの企画でいっしょにゲームやスポーツをしたり、踊りや歌を楽しんだりするうちにすっかりうち解けていた。後日発行された学校新聞には、「はじめはどんな人かなあ～、とちょっと緊張していたけれど一緒にゲームをしているうちに、だんだんなれてきました」(小学5年生)、「水飲み場を教えてあげて、ありがとうといわれたことが心に残りました」(小学6年生)といった感想の言葉が載っている。また、「外国の人と話をしたい…というささやかな思いが国際理解の芽を育て、偏見や差別のない人間としての触れ合いを培ってくれるものと確信しています」と、ある校長先生が言葉を寄せている。どこの学校でも帰り際には、覚えてたの外国語で研修員一行を見送ってくれた。

一方、子供たちとの学校交流を終えた一行は地元町民との交流会への参加や漁業施設の訪問、海底探勝船に乗船しての視察など盛りだくさんの行事を通じて日常の研修とは異なった北海道を体験した。



JICA研修員(ケニア出身)と話すこどもたち  
(静内町で)

ナ、ケニヤ、ベナン、メキシコなどからのJICA技術研修員11名、ネパール、ブータン、中国、ブラジルなどからの北海道海外技術研修員12名、サハリン技術研修生など3名の計26名が参加し、町内の春立生活センターなどを会場にジャンケンや手つなぎオニなどのゲームで地元の子供たちと交流したが、海外からの研修員と初めて接した子供たちの生き生きとした様子はまわりの大人たちを驚かせていた。

当日町内で開催中の「秋の味覚まつり」に参加して会場で紹介されたり、静内ホースフェスティバルの会場で乗馬施設を見学したり、研修員からは「人々に暖かく迎えられる嬉しかった」とか、宿泊先では男女別に雑魚寝を体験し、「こういうのは初めて。でも楽しかった」という感想が聞かれた。2日目は、鮭の陸揚げや加工場、また漁協なども見学するなど日高地方の特色ある産業、文化に浸った2日間を過ごした。



北海道の技術研修員(ネパール出身)が訪れた  
中学校で(積丹町で)

### 「海外研修員との交流会 in 静内町」 9月29日(土)

静内町では北方ヤングクラブ(NYK静内、大澤晃弘代表)との共催で国際理解促進事業を行った。パレスチ